

逆境の中でこそ輝く拓殖大学の人材育成



福田 勝 幸

拓殖大学理事長

二〇二〇年、世界は強い逆風にさらされました。新型コロナウイルス感染症が社会に暗い影を落とし、経済回復の道筋は見えていません。「民、貧すれば乱を思う」と言いますが、世界がいま激変期の入り口に立っています。そうした厳しい年に拓殖大学は創立一二〇周年を迎えることができました。思えば「逆境にあってこそ発揮される」のが拓大精神です。故きを温ね、本学創立の動機にさかのぼれば、そのことは明らかです。

一八九五年、日本は日清戦争後、台湾統治に乗り出しました。しかし風土病や抗日運動が頻発し、当初はなかなか思うような成果を上げることができませんでした。初代台湾総督の樺山資紀に随行して台湾へ渡った民政部長の水野遵は、厳しい現実を目の当たりにし、彼が中心となって、一八九八年、台湾開発の研究機関として台湾協会が設立されました。拓殖大学の前身です。会頭選ばれたのは台湾総督とドイツ留学を経験した桂太郎でした。

つまり本校は創立の第一歩から直面する難題を解決するという実学としての使命があったのです。では、台湾協会はどのように諸問題と取り組んだのでしょうか。さまざまな研究を経て最終的にたどり着いたのは「人材育成こそが要」という結論でした。そうして設立されたのが台湾協会学校です。

目の前には現実の台湾当地で起る諸問題があり、卒業生はみな、現地に渡り土地の人々とともに汗を流しました。大きな地域開発事業から人々の民生問題、福利の発展に取り組み、そうした仕事の中で培ったノウハウを再び大学に還元するという良質なサイクルが形成されていたのです。大学を媒介して卒業生と在校生が意見や情報を

交換し、蓄積されるという星霜を経て本学の教育方針や建学の理念が形作られていきました。その結実の一つが創立二〇周年の記念にあわせて制定された校歌です。

「人種の色と地の境、我が立つ前に差別なし 膏雨ひとしく湿さば 礪确やがて花咲かむ 使命は崇し 青年の力あふるゝ海の外」は、まさに本学卒業生が仕事に取り組む姿と精神を謳っています。また第一次世界大戦後に日本が国際連盟の規約の中に入れるようベルサイユ講和で提案した「人種的差別撤廃」の思いもここに込められています。現在、世界は多様性を掲げながらマイノリティーに厳しいという現実の壁と向き合っています。現在に照らしても少しも色あせない理念といえるでしょう。

二〇〇〇年、本学は平成天皇、皇后両陛下をお迎えし、創立一〇〇周年記念式典を挙行了しました。その中で、天皇陛下から「第二次世界大戦後、日本と日本を取り巻く環境は大きく変わりました。しかし、『積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成』という建学の精神は今日に生きるものであり、日本が今後ますます国際社会の平和と繁栄に貢献していくためにも、この大学から、国内においてはもとより、開発協力を始めとする様々な分野で世界を舞台に活躍する人々が数多く送り出されていくことを期待しております」とお言葉をいただきました。

本学第一〇代総長の矢部貞治は、創立六〇周年史において、本学建学の理念を創立の設置目的と初代校長桂太郎の訓示及び校歌に謳われている「民族の平等と人間尊重、国際友愛の理想」に立って、「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成」と表現しました。この精神は、拓殖人材の育成を掲げた二〇一五年からの「教育ルネサンス事業」にも引き継がれ、今日に至っております。

時代の変化に対応しながらも決してぶれることない軸をそなえた人材。そうした精神を持っていけば、後にこの厳しい時代を笑って振り返ることができるはずです。